

【グローバルアイ】100歳在日光復軍と大阪療養施設「サンボラム」

#老兵の手は暖かかった。韓国でまたお会いしたいという言葉で一気に若返ったように見えた。16歳という若さで光復軍に合流したオ・ソンギョ愛国志士は一生のほとんどを日本で過ごし、百歳を迎えて韓国行きを選んだ。「余生を韓国で過ごしたい」と父親の願い。白髪だらけの息子はこれを聞いてどのような気持ちだっただろうか。

今月11日、東京練馬区のある賃貸住宅。オさんの息子は頭を下げたまま韓国から父親を迎えに来た報勲部長官の会話に耳を傾けていた。韓国語ができない彼が会話の内容を理解していたかどうかは分からないが、正座をしたまま約30分間、微動だにしないままだった。彼もやはり家長であり、家庭の日々の生活のこともあって父親の世話をすることは難しかったという。これからは韓国に行かないと会えない父親。子息としてつらいことだったかもしれないが、彼は「父が願んだことですから」と言いながら、なんとかして複雑な感情を隠そうとしていた。

#「奇跡のようなことが起きたんです！なんということでしょう、車椅子に座っていたおじいさんがすっと立ち上がったんです！」受話器向こう側で興奮した声が聞こえた。大阪にある在日同胞高齢者のための支援施設「サンボラム」の高敬一（コ・ギョンイル）代表の言葉だ。車椅子がなければ挙動が難しい在日同胞第一世の~~大層者~~デイサービス利用者の一人がチャング（太鼓の一種）の伴奏に出てくる韓国民謡を聞いて立ち上がったということだ。高代表は「これが民族の血なのかと思った」と話した。

高代表がいわゆる「在日」と呼ばれる同胞高齢者のために療養施設を作ったのは1990年代。日本政府が、韓国でいう療養保険制度を導入したが、貧困の在日高齢者が行くところはなかった。日帝強占期時にさまざまな理由を抱いて日本に渡ってきて、差別や貧困の苦しみを乗り越えて生きてきた第一世の~~無難死~~困難な状況が在日2世や日本人の支援者たち~~高さを~~突き動かした。最後の瞬間くらい生きてきた甲斐があったと思ってもらいたいという一心で、その意味を韓国語に込めて「サンボラム」という施設名にした。

ここ~~に大所~~を利用している在日高齢者は45人。このうち半数が第一世代で超高齢だ。「本当に変です。皆さん、日本語は忘れても韓国語は忘れないで、日本の食事が喉を通らなくても食べられなくてもキムチは召し上がります」。アリランを歌って、キムチを漬けるここの運営は厳しい状態だ。新型コロナウイルス感染症（新型肺炎）の余波で利用者の状態が良くないためだ。

日本の超高速高齢化を話しながらも、日本社会の中の非主流で日帝強占期の時に連れて来られるようにしてやってきながら、韓国語とキムチで最後を迎えたいと思う在日高齢者の言葉の中にあるものを、私たちはすぐに気づくことができない。駐日韓国大使館によると、日本に住んでいる在日外国国民は約48万人。このうち100歳以上の超高齢者は今年基準で42人だ。彼らがどのような最後を送れるようにするのか、また彼らの願いは何か、今は耳を傾けるべきではないだろうか。

写真キャプション

大阪にある在日同胞高齢支援施設「サンボラム」。入所者のために食事にキムチを出したりアリランを歌ったりする。